

図書館

内科学講座 血液・腫瘍内科部門 長藤 宏司

研修医を終え、2年間の研究をしているとき、よく図書館に行った。何か新しい論文がないか、とふらっと行くことがあり、目的の論文が決まっていたコピーを取りに行くこともあった。当時はインターネットが普及しておらず、紙ベースで論文を探していた。雑誌は、開架式の状態ですぐ2年あり、その後製本されていた。目的の論文が製本中で見ることができないと、がっかりした。アルファベット順に整理された書庫で、自分が目的とする論文を見つけると、何回もコピーされて製本がぼろぼろになっているもの、あまりコピーされた形跡のないものがあり、製本の外観で分かる論文の引用頻度 *citation index* だった。夜遅く暗い図書館に行き、新しくクロージングされた遺伝子の掲載されている論文をコピーして、それから PCR のプライマーを設定、プライマーを研究室の機械で作成し、翌朝からは PCR の実験をした。

今は、インターネットのおかげで、情報は溢れており、医局でも自宅でも、リアルタイムに出版された論文の情報が入ってくる。簡単に論文検索でき、久留米大学図書館のデータベースを介して（久留米大学 EZproxy サービス <https://ej.kurume-u.ac.jp/login>）、自宅でも論文をダウンロードできる。図書館に足を運ぶ必然性は薄れているかもしれない。

図書館に行き、深とした空気の中、古い書物が出す独特のにおいのなかで、目当ての論文を探し、それを自分でコピーしながら、「なんとかいい論文を書きたい」と頑張っていた昔を時々思い出す。